

# CLCからしだね書店便り



5

May  
2024  
no.41



## \*今月のご案内\*

- ① 連載第5回  
「子どもと大人のためのこころの対話  
—信仰と哲学—」
- ② 読書感想本『聖書の読み方』
- ③ 子どもの日によせて…

CLCからしだね書店 店長

CLCからしだね書店では…

- ① キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- ② お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- ⑤ 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- ⑥ 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
- ⑦ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店 & トラリアーゲン  
営業時間 11:00-17:00  
日曜日と年末年始（※祝日も営業）  
定休日 毎月第3木曜日は書店のみ営業

前回のあらすじ:

「哲学カフェ」べれや」のマスターは、独自の  
仮説を唱える。彼いわく、「イエスは律法主義特  
定の宗教的規範を絶対化し、人を断罪する考え  
方」に対し、信仰の本質を取り戻すために哲学  
的な問い直しを行ったのだ」と。

タネオくん: マスターの言わんとしていること  
はなんとなくわかってきたのですが、やはり自  
分の頭で考えた知恵よりも、信仰の方が大事な  
んじゃないでしょうか？

マスター: 「AかBか」と二者択一的に問われると、  
私たちはつい反射的に、「二つのうちどっちか一つだけが  
正しい」と錯覚してしまいがちになる。だから、「AかBか」と  
二項対立的に考えたら要注目だ。哲学者の吉野一徳は、  
これを「問い方のマジック」と呼んでいる。

からしちゃん: 猫派？犬派？どっち？みたいな感じですか？  
マスター: ちなみにからしちゃんは何派派？

からしちゃん: どっちも好きなので順番はつけられません！  
タネオくん: ぼくは文鳥が好きですね。

マスター: この二人に聞いただけでも、「どっちかが絶対に正し  
い」わけじゃないことがわかるね。でもこいつうのはどっち？教  
育は子どものためにある？それとも社会のためにある？

つにはどんな教育が必要？」とか？

マスター: 二人ともすごいぞ！その問い方なら、「子ども派」と  
「社会派」の不毛な対立を避けられる問い方に近づいたように思  
えるね。

タネオくん: あれ、なんだか話がまた逸れてきてませんか？

マスター: ごめんごめん。そう、つまりだ。「知性か？信仰か？」  
という風に問うのは……。

タネオくん: 問い方のマジック。

からしちゃん: 二項対立の罠、ですよね。

マスター: そのとおり。現にイエスはこう言っている。

心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽く  
して、あなたの神である主を愛せよ。  
(ルカの福音書10章27節)

マスター: イエスによる旧約聖書の引用だ。「知性」という言葉  
がここに出てくる。原語のギリシャ語では「フィアノイア」。知  
的な「理解力」や「洞察力」を意味する言葉です。クリスチャ  
ンとして、この点を軽視すべきではないと思う。イエスは「知  
性を捨てて頭ごなしに妄信せよ」とは言っていない。むしろ、  
知力を含めた、あなたの全能力をフル活用して、真実なものを

からしちゃん: えっ……そりゃあ子どものためじゃないの？

タネオくん: でも、社会の役に立てるようにすることが教育の  
役目なんじゃないの？

マスター: 二人とも早速ひっかかってしまったね。これは、どっ  
ちも大事」と考えざるをえないんじゃないかな？二者択一にし  
なきゃいけない理由なんてないよね。教育はもろろん子どもの  
成長と幸せのためにあるわけだけど、その「幸せ」っていうのは、  
社会の中で他者と共に生きていくことと不可分だよね。だから、  
「さあ、どっち？」と聞かれると、この問いに答えられなくなっ  
てしまう。

からしちゃん: だまされた!!

タネオくん: うーん、じゃあ、どういう質問の仕方ならいいん  
ですか？

マスター: おっ、鋭いね。そうなんだ。大切なのは、問いの立  
て方なんだ。最初の問いの立て方をまちがえると、すべてが狂っ  
てしまう。断崖絶壁を指し示すコンパスに従っても意味がない  
ようにね。ぼくの大学時代、哲学の先生は、「問いを美しくたて  
よ！」と、口癖のように言っていた。熱い先生だった(笑)

タネオくん: うーん、じゃあたとえば……「子どものためにも  
社会のためにもなる教育ってどんな教育？」とかですか？

からしちゃん: 「子どもが社会の中で自由に生きられるように育

追求せよと、そう教えているんだ。

からしちゃん: だとすれば、知性を捨てて「偉い先生」の言っ  
ことを無批判に信じ込むことは……。

タネオくん: むしろ「不信仰な姿勢」ということになっちゃう？  
マスター: まあ、「不信仰」とまで言うかどうかはともかく、少  
なくともこうは言える。信仰は反知性主義ではありません。知  
性を捨てることは「何を信じればいいのか」を正しく吟味し、  
見極める判断力を捨ててしまうことだ。

からしちゃん: 知性を捨てる人は神を信じているつもりで、いつ  
の間にか偶像を信じてることになりかねないってことですね。

マスター: 排他性に凝り固まった自分の信念を崇拝する、なん  
てことになったら、それこそ宗教戦争の時代に逆戻りだ(連載  
第一回参照)。

タネオくん: すでにそうなりつつある気がします。

マスター: だからこそ、「そもそも……」を根本から、共に、真  
摯に、問い直す姿勢が大事なんだ。「当たり前」とみなされてき  
た価値判断の根拠を、他者と共に丁寧に吟味し、言葉にもたら  
していく。この「哲学」という営みこそが、現代世界の隣人に  
なるために、私たちに求められている必須の教養になる。ぼく  
はそのために、この哲学カフェ「べれや」を開いたというわけ！  
からしちゃん: ぜんぜんお客さん入ってないみたいだけど……。

今回のまじです。

①「AかBか」と二者択一的に問われると、私たちはつい反射的に、「二つの内どちらか一つだけが正しい」と錯覚してしまいがちになる。これを「問い方のマジック」「二項対立の罠」といふ。

②「信仰が知性か」と問うのは問い方のマジック。イエスは「知性を放棄するな」ところか「知性を反へてて真実を探求せよ」と教えている。

③知性を捨てることは「何を信じればいいのか」を正しく吟味し、見極める判断力を捨ててしまっているためである。

④知性を捨てる人は神を信じているつもりで、二つの間にか偶像を信じていることになりかねない。

さて、「判断力」といえば、イエスがこんなことを言っています。

さかおか おおじ

1988年京都市生まれ。北海道大学大学院教育心理学講座修士課程修了。札幌市内の児童精神科で臨床心理士として勤務。本質学研究会、哲学プラクティス学会、宗教倫理学会、キリスト教教育学会等の学術誌に論文掲載。札幌市若者支援施設Koudo+(ユースプラス)でワカモノ哲学カフェを主宰するなど、オンラインや地域で子ども、若者と共に哲学対話を行う活動に取り組み。



あなたがたは、何が正しいか、どうして自分で判断しないのですか。(ルカの福音書12章57節)

「鯛の頭も信心から」というように、何も判断せず「先生」(当時で言えば律法学者)の教えを鵜呑みにする態度は、イエスの求める信仰とはズレているようにです。むしろ「じゃんと自分で考え、吟味し、判断せよ」と、そう語られているように聞こえます。

また、詩篇の著者はこう祈っています。

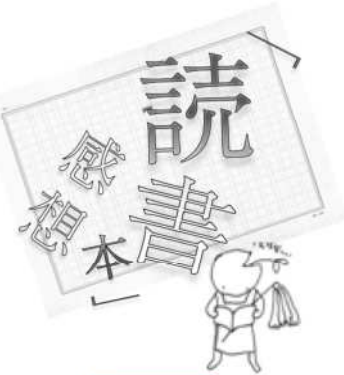
良い判断と知識を私に教えてください。(詩篇119篇66節)

「蛇のように賢く、鳩のように素直であれ」とイエスは言いますが、やはり「知性」は、物事の本質を見極めるために必要なのだと考えざるをえません。しかし、「見極める」「吟味する」ことは、一体どのようにして可能になるのでしょうか。今回はこのテーマについて考えてみたいと思います。

### 自分を大切に「聖書の読み方」

#### 『聖書の読み方』

(加藤常昭 オンデマンド版・日本キリスト教団出版局、2,400円+税)



キリスト教書店で働いていると、聖書の入門書の多さに驚きます。これらの入門書で、最近よく目にするのが、聖書を「読破する」とか、聖書を「通読する」などと謳ったものです。これらの修行めいた表現を見ると、私たちが聖書を読むそもそも動機について考えさせられます。

加藤常昭の『聖書の読み方』も、数ある聖書入門書のうちのひとつ―それも古典的なものひとつ―です。1961年初版の本書は、昨年オンデマンド復刊されました。150ページほどのコンパクトな本で、いかにも「入門書」という感じがします。

しかしこの本は、一般的な入門書のように、聖書に関する基本的な知識や、聖書を読む方法や規則を教える本ではありません。むしろ聖書に向き合う私たちの姿勢や、聖書と私たちの関係という、より基礎的な部分から説き起こします。

著者は「はじめに」で次のように述べています。

この本は聖書の歴史や思想についての知識を与えるためのものではありません。そういう意味での聖書入門、ふつうの書物にはすぐれたものがいくつもあります。できればこの本と別にぜひ読んでほしいと思います。(中略)ここでは、われわれ自身が聖書を読むのに、どのようにしたらよいかという二つを考えてみようというのです。(5頁、傍点原文)

「われわれ自身が聖書を読む」という主張は、一見すると当然です。実際、多くのクリスチャンが、一人で、あるいはグループで、自主的に聖書を読んでいることでしょう。しかし、自主的に見える行動の裏に、「このように読むべき」とか「このように理解しないと」という気持ちや隠れているとすれば、それははたして真に「われわれ自身が」読んでいることになるのでしょうか。本当の意味で「われわれ自身が聖書を読む」ためには、単に誰かの指図を受けないで自主的に「読むという行為」を行うだけでは不十分です。そうではなく、「こう読まなければ」とか「こう理解すべきだ」といった、特定の読み方や解釈を指定してくる、



内面化した権威主義的な声<sup>2</sup>を振り払い、自分の頭と経験と常識を使って主体的に読むところが、「自分自身が読む」ということなのです。

そのような主体的な姿勢で聖書と向き合うことなしに、真に聖書から影響を受けることはできません。というのも、経験・知識・理性・感覚など、自分を自分たらしめる要素を総動員してテキストに取り組むこと―すなわち主体的に読むこと―なしに、読書を通じた自己変革はありえないからです。逆説的ですが、真に自分を変える読書を経験するためには、自分にこだわり、自分を大切にする必要があるのです。

しかし宗教の聖典など、伝統と権威のある書物を読むとき、人はなかなかそのような態度を取れないものです。どうしても「教えを受ける」とか「学びを得る」という受動的な姿勢になりがちです。しかしそのようにして自分を抑え込むことで自分が変わったように思えたとしても、それは真の自己変革ではなく、むしろ「自己無化」と言うべきでしょう。

著者の主張する「われわれ自身が聖書を読む」ということは、このような受動的な読み方ではなく、自分自身の考えや感情を大切にしながら読むことです。著者は言います。

自分の弱さやみじめさや、あるいはよろこびが姿をみせな

もしかすると入門書や解説書を読めば、それらをどう理解すべきかが書かれているかもしれない。問題集の解答を見るのは、勉強を進めるうえで必要なことです。しかし、私たちの生き方にかかわるような読書をするときに、安易に「解答」を見てしまっ

ていいのでしょうか。  
むしろそのような「解答」がたとえそれが正しい答えであつたとしても―私たちと聖典との対決の機会を奪っていないでしょうか。入門書が、聖典と私たちとの直接の出会いを妨げる余計な緩衝として働いていないでしょうか。「分からなさ」を無視し、すんなりと「理解」することで、読みを深めるチャンスを見ずみす逃していませんか<sup>3</sup>。

著者の以下の言葉は、「聖書の読み方」というテーマを超えて、私たちに宗教との関わり方自体を再考するよう促します。

われわれが聖書を読むのは何のためかと言えば、パウロに從って「キリストを得るため」ということができます。しかし、それは同時に「キリストのうちに自分を見いだすため」なのです。その点でよく諷解があると思います。信仰を持つとは、自分を捨てきつてしまつたことであると考ええる人があります。それは確かにそうです。(中略)けれども信仰の世界は自己を発見する世界であるといつてもいい

いような聖書の読み方はないのです。(中略)自分のことをしばらく捨てておいて聖書を読んでみるということは、聖書そのものがゆるさないので。(25頁)

多くの入門書が、この点を見落としています。要領よく聖書の大枠に関する知識や全体的な解釈の枠組みを提供しますが、「自分が」聖書を読むことの重要性に言及することはあまりありません。むしろ聖書という不動の権威に対する従属的な姿勢を説くことのほうが多いようです。あたかも、喜びは聖書の中にすでに存在していて、私たちはそれを理解し、受け取るだけでよいとも言つように。ここでは私たちが聖書に抱く疑問や反感、違和感などは、無視されるか、最終的には何らかの形で解消されるものとしてしか捉えられていません。

しかし読書の喜びは、そのように「すでに存在している」わけではありません。本そのものの中に喜びが備わっているのではないのです。聖典といえども、読まなければ無意味です。喜びは、私たちが自分の人生経験や感情や知性を聖典の言葉にぶつけることで「生まれる」ものなのです。

入門書を求める私たちの中に、自分と聖典との、こうしたぶつかり合いを避ける意識が働いていないでしょうか。たしかに聖書を読んでいると、難解な箇所や引つかかる箇所がたくさん出てきます。

と注意する必要があります(中略)信仰とは、自分をほんとうにたいせつにする心です。自分を生かす心です。自分を押し殺そうとするような心ではないのです。信じなかつた時には思つてもみなかつたように、自分がたいせつにされていること、自分の生命の重さをずしりと感じて生きていくこと、それが信仰です。(30～31頁)

このように、本書は、「そもそもなぜ私たちは聖書(や諸宗教の聖典)を読むのか」という原点に帰ることを読者に勧めます。そうすれば、「読破」や「通読」を目指さなくても、自ずと自分を大切にする「聖書の読み方」で読み進められるはずだからです。【書店員凱

①「「読破」「読み切る」などの表現も見られます。

②「自分と聖書との関係から生じるのではなく、自分と教会などの組織との関係によって養われる」「正しい」信仰に対する規範意識、あるいは内面化した信仰規準のようなものことです。これは、組織における「正しい」読み方、つまり教義的に正しい読み方を、自分の実感に優先させるよう働きかけてきます。

③「もちろん、入門書が有害だとか、聖書だけを読んでいればいい、などと言いたいわけではありません。それらの本も、先に書いた「主体的な読書」のための一つの道具として使うのであれば有益でしょう。ここで問っているのは、聖書を読む私たちの姿勢です。

加藤常昭さんは、2024年4月26日に召天されました。享年95歳。

子どもの日によせ!

# 「小さな人たなメッサージ」からの

CCCからしだね書店  
店長

私事ですが、この夏、娘に女の子が生まれました。初孫です。孫はかわいいものだと言いますが、なるほど、それはよくわかりました。

ただ、「かわいい」という感情が「孫だからなのか?」という、確かにそういうこともあるのだからとは思いますが、彼女の小さな体からあふれ出す「生きたい」という強い意志は、孫という域をはるかに超えて、私の中に眠る「かわいい」という感情をぐいぐい引っ張り出すのでした。

彼女は大人の都合などおかないしに容赦のない要求を突きつけてきます。それに応えて彼女を抱き、彼女の呼吸に合わせてゆるゆるとその小さな体を揺すっている、あかちゃんが弱く小さく、やわらかく、まあるく創られていること、その声もしぐさもなんと愛らしく創られていること、これらはみな、まったく無力な「小さな人」に備わった神さまの賜物であり、生きていくための術なんだという確信がわいてきます。

小さな彼女は「あたしをかわいがってください」「あ

主張しているように見えます。

おいしい食事を与えてもらう権利、からだを洗ってもらう権利、清潔な衣服を着せてもらう権利、安心して眠る権利、楽しく遊ぶ権利、成長するのを助けてもらう権利、安全に守られる権利、めいっばい愛される権利…

「わたしたち小さな人たちの権利を、だれがまもってくれますか?あなたですか?」

と、大きな人たちの代表としての私は、彼女から鋭く問われます。

その厳しい問いかけにおろおろしているとき、新聞で双子を授かったお母さんが、生後3カ月の女の子を、ふとんの上に落として死なせてしまうという事件があったことを知りました。ミルクをなかなか飲まずに眠ってしまった我が子に、「飲んでよ」と呼びかけたところ、夫に「うるさい」と言われた。そして衝動的にあかちゃんを落としてしまった。あかちゃんは「びっくりしたような表情をして」それから大声をあげて泣いたのだそうです。

「びっくりしたような表情」という言葉が、孫のそれと重なりながら、私の胸にキリのように突き刺さりました。優しく庇護してくれていたお母さんの手からいきな

たしをまもってください」「あたしのおせわをしてください」と、全身を使って要求してきます。抱っこした腕に密着する彼女の頭と背中中は、やわらかくしなやかに温かい生き物の熱を帯びています。生後1か月にして、泣き方のバリエーションを身に着け、のどの奥を鳴らすように甘えた声を出しては大人を呼びつけ、抱っこをせがみます。泣き声の調子と音量も、何段階かに切り替えながら使い分けているようです。おっぱいがほしい、おむつを替えてほしいという生理的な要求だけでなく、他者とのふれあいを求め、「コミュニケーションを取ろうとするのです。だからあかちゃんの泣く声は、言葉であり、会話なんだと思えてしかたがありません。大人は、あかちゃんの泣き声にこたえて「そうかそうか」「わかったよ」「だいじょうぶだよ」「おなかがすいたの?」などと話しかけてしまいます。

ときに、彼女は哲学者のような顔をすることもありま。彼女の目は、私の目をじっと見据えて離しません。「私は、小さな人たちの代表として、あなたに直面しています。」と訴えてきます。彼女の背後に世界中の小さな人たちの気配を感じます。小さな人たちに、神様が与えてくださった優しい権利を、その代表者として力強く

り落ちて、その落とされた衝撃を全身に受けて、何が起きたのかもわからず、ただただ「びっくりしたような表情をして」、それから3か月の女の子は、最後の声を振り絞って、大声をあげて泣いたのです。

「わたしたち小さな人たちの権利を、だれがまもってくれますか?あなたですか?」

と、私はまたしても鋭く問われます。

「もしも私がこの子を虐待したら、この子を連れてすぐに逃げて」と、娘は自分の夫に言っているのだそうです。その時は、お母さん、この子のこと、よろしく」と娘に言われて、私は「わかった。まかせて」と、応えました。「でもその時は、まずは誰よりもあなたがケアされないといけない」とつけ加え、我が子を落としてしまったお母さんのことを思っ、私は少し泣きました。

書店と関係のない話ですみません。でもどうしても書かすにはいらなかった、小さな人たちからのメッセージです。

「京都のすみっここの小さなキリスト教書店にて」  
『月刊 いのちのこ』2023年11月号掲載文◎

第4回 **CLC** からしだね書店トークイベントのお知らせ

# 『私は、日本社会をさまよう 難民たちの「隣人」であるか?』

問題の多い「改正」入管法が成立して一年。

いよいよ6月から本格運用されます。

長年、難民、在留外国人、海外ルーツの人々の支援に取り組んできた  
ビスカルド篤子さんに、これまでの活動や人々との関わりの中で、  
ご自身の人生がどう変えられていったか、存分に語っていただきます

語ってくださる人: **松浦ビスカルド篤子**さん

とき: **2024年7月6日(土)**  
14:00~16:00 (13:30 受付開始)

場所: **からしだね館** 京都市山科区勤修寺東出町75  
オンラインzoomでの参加も可能

参加費: **1,000円** (当日受付にて)

オンライン参加の方は、下記にお振込みください。

ゆうちょ銀行

【店名】四四八【店番】448  
【預金種目】普通預金  
【口座番号】5095209  
【名義】社会福祉法人ミッションからしだね

申し込み受付:

TEL **075-574-2800**  
FAX **075-574-0025**  
E-mail **clc@karashidane.or.jp**

CLC からしだね書店 (担当: 坂岡恵)

申し込み締め切りは**2024年7月3日(水)**です

申込み  
「難民・隣人  
講演会」参加

参加形態: 来場・オンライン  
※いずれかに○をしてください

お名前:  
ご住所:  
電話番号:  
E-mail:

・アーカイブ配信希望(後日参加)

しめきり過ぎても受け付けます!!

講師紹介  
**<松浦ビスカルド篤子さん>**

カトリック大阪高松大司教区  
シナピス 副センター長  
1963年生まれ、神戸市出身。カ  
トリックミッションスクールで社  
会科・宗教科の教師として働いた  
が、1991年の湾岸戦争をきっかけに、カトリック大阪大司教区「平  
和の手」(現シナピス)に転職。カ  
トリック教会を基盤にした人権  
ネットワーク組織の事務局に所属。  
シナピスのなかでも主に難民移住  
者の対応にあたる。  
神戸女学院大学非常勤講師。大阪  
市在住、ダーリンは南米ペルー出身。

SINAPIS



このたびの能登地震でいくつかの現地キリスト教会を中  
心にして立ち上がった**能登ヘルプ**(能登地震キリスト災害  
支援会)には、たくさんの善意の支援物資が届いたそうです。  
その中には消費期限前に配布しなければならぬ食品もあ  
ります。ただ、どうしても被災者に配り切れずに余ってし  
まうもの(フードロスになるもの)もあるようです。そう  
いう**善意の余剰品も含めての被災地支援**ですし、それがな  
ければ余裕を持った支援活動はできないと思います。けれ  
ども、「これらの余ってしまった支援物資を被災地でなんと  
か処理してください」というのも、なかなか厳しい被災地  
の現状があります。  
それでミッションからしだねでは、**フードロスになる寸  
前のものを京都に送っていただき、被災地支援の現状を知っ  
ていただくために、いくつかの団体にお贈りして食べてい  
ただく働きを、日ごろから協力関係にある愛生会介護老人  
保健施設おやけの里さんと一緒に取り組みます。**特に5  
月11日(土)には、おやけの里の裏にグラウンドがある  
京都橋高校サッカー部の皆さま、保護者の皆さま、OBの  
皆さまに食べていただくことになりました。



被災者の方々に思いをさせ、被災地支援を身近なものとし  
て感じ、また災害はいつ私達を被災者にするかわからないと  
いうことも含めて、若い皆さまに実感していただくことがで  
きればと願っています。余剰支援物資を京都に送るために奔  
走してくださった**NGOオハレーション・プレジックゲ・ジャ  
パン**、フードロス削減のための活動をしている**NPO法人い  
のちのパン**、ご協力くださった**能登ヘルプ**に感謝いたします。

## 能登ひびき災地支援

# 古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただくとありがたいです。(受付できないものもありますので事前にお知らせください。ご事情により当店より回収に行かせていただくこともあります。ご相談ください)

## 【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本 (多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし (料理、健康、経済等) にかかわる本
- 5 小説 (人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画 (人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌等は受け付けておりません

## 【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館  
宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX：075-574-0025  
Mail：clc@karashidane.or.jp

## 【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

## 【献本感謝】

荒井美江子様、久保井悦子様、宇野典子様、兼松好子様 (順不同)

## 4月の古書の収益は64,429円でした。

【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、書店で働く障がい者の工賃になります】  
献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思っております。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

## 編集後記

◆大型連休も終わりました。書店は、いつもと同じように営業していましたが、「世の中の皆さんは休んでいる」と思うと、働いている私たちも少しゆったりとした気持ちで過ごすことができました。皆様、楽しい休日でしたでしょうか？◆今月号は、5月5日の子どもの日を意識して作ってみました。「これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです (新約聖書マタイ 25:40)」【店長】



2023年私たちは、「からしだね書店だより」に『**子どものための神の物語**』を連載しました。とても好評でしたし、私たちも愛着があり、子どもたちのためにも、ぜひ刊行を願っています。

そこで、みなさまにも資金面でのご協力をお願いできないでしょうか。

発行部数 1000部

定価 1000円 (+税)

頁数 28ページフルカラー

発行時期 2024年内を  
目標とします。

事前に予約し、入金くださった方には一部700円でお渡しいたします。  
もちろん寄付も大歓迎です。どうぞよろしくお願いします。在ま

【ゆうちょ銀行】記号：14440 番号：43935061 口座名 タキビジユク

【ゆうちょ銀行以外の銀行から】店名：四四八(ヨンヨンハチ) 店番：448

普通預金 口座番号：4393506 口座名 タキビジユク

大頭画(一文)・森住ゆき(和紙ざり絵)・坂岡恵(からしだね書店)

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね  
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス  
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館  
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025  
書店メール clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店便りの  
バックナンバーはこちらから

